薬製造所付）をへて同三十二年京都帝国大学理工科大学助教授となり、同三十四年十月ドイツへ留学し、同三十八年十月帰国して本校教授となった。同四十三年三月に京都帝国大学理工科大学教授として転任している。

大築は本校在職中、本務の傍ら特に写真の科学的研究につとめ、そのための設備も整えた。そして、明治三十九年には校友会に大築の指導による写真部ができて盛んに写真展を開くようになり、また、校友会月報や作品集その他校内の出版物の写真において工芸化学教室や写真部の活躍が始まった。これらのことが土台となって、大正四年に本校に臨時写真科が誕生するのである。

本校に於ける大築の写真研究は正木直彦校長のバックアップによるものであった。大築の履歴書（本学蔵）には「同〔明治〕三十五年八月一日美術工藝ニ関スル應用化學研究ノ爲滿二ヶ年間獨國へ留學ヲ命ス」と記されており、主目的は工芸化学の研究であったが、留学に際して正木は特に写真術の学理的研究を依頼した。このことは大正四年二月十三日付『時事新報』に掲載された臨時写真科設置に関する談話の中で正木自ら述べている。かくて大築はベルリンのTechnische Hoch-Schule の Miethe 教授の写真化学教室で研究をとげ、帰国早々本校教授となるが、このことも留学中から約束されていた様子である（鎌田弥寿治著『日本写真教育史』昭和五十年。東京写真大学短期大学部出版部）。そして、これは本校校長に就任して間もない頃の正木が芸術の科学的研究および写真研究の方面に力を注いでいたことの証しといえよう。正木は大築の帰国を待ちつゝ、その間の明治三十五年から同三十八年まで本校年報に於いて化学教室新設要求を続け、準備をすすめたのであった。

② 藤島武二の留学

明治三十八年九月二十日、助教授藤島武二は満四ヶ年間フランス、イタリー両国留学を命ぜられ、同年十一月十八日に出発した。西洋画科では最初に岡田三郎助が、次いで和田英作、浅井忠が国費留学生に選ばれ、浅井は帰国後京都高等工芸学校教授となり、岡田、和田は本校教授に就任した。藤島も当然留学生に選出されるべき立場にあったが、浅井のあと、本校からは下村観山、桜岡三四郎、白井雨山、白浜徵ら他科の教官らが国費留学生に選ばれ、藤島に順番が回って来たのは岡田の留学より八年も後のことであった。

藤島の履歴書（本学蔵）には留学中の修業に関して左の記述がある。

同〔明治〕三十九年　月　日　佛國々立美術學校入學　教授コルモン f. Cormon 氏ニ就キ油繪ヲ學ブ
同四十一年　月　日　伊太利ヘ轉學　在羅馬カロリユス、ヂユラン Carolus Duran 氏ニ就キ油繪ヲ學ブ
同四十三年一月廿六日　歸朝

黒田清輝、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作らはいずれもラファエル・コランに師事し、藤島も黒田からコランを尋ねるようすすめられたが、彼は敢て別の師を選んだ。左記は藤島の回想記の留学

時代の部分だが、この中で右の理由についても述べている。

足跡を辿りて

藤島　武二

明治三十八年といへば、日露の戰役が終つた年で、私は文部省から命ぜられて海外へ派遣された。それ以前の習作的制作は主として私の所屬してゐた團體白馬會で發表してゐた。外國生活四年、明治四十三年の春、伊佛の覇旅から歸つて來たが、私の未だ滯歐中の、明治四十年に文部省が主催する所謂文展が初めて上野で開かれ、それに關するいろんな通信や雜多の噂をうけたものである。當時巴里にゐた留學生といへば、山下新太郎、有島生馬、齋藤豐作、鹿子木孟郎、岡精一の諸君で、われ〳〵留學生仲間では、政府のその計畫を善意に解釋し、好感を以て迎へることが出來た。

第一回展に和田三造君の『南風』が當時の最高賞ともいふべき二等賞になつたときいて、直接作品は觀た譯ではないが、相當努力したものであらうことは解り、その作品の出來ばへを想像してゐたものであつた。一等賞の授賞規定をつくりながら、何故二等賞にしたのか後から見てそれ程のものでなくても、當時比較的よいものであつたら最高賞を與ふべきだなどゝ、大陸的に感情と似ても似つかぬ日本人根性をくさしてゐたり、噂し合つてゐたものである。

何しろ何千里外のことであり、文展といふものが開かれたぐらゐの輕い概念に止まつてゐて、大した熱意を以て期待してゐる譯でもなく、況んや遙々本國へ作品を送つて、自己存在を主張しやうといふ人もあつた譯ではなかつた。どつちかといへば至極愼々たる氣持の儘に、傍觀的態度で眺めてゐたにすぎなかつた。といはうよりも海外における、當時の私達の自己經營がかなりの苦心の中にあつたのと、歸れば展覽會の性質如何によつては、相當の期待もあつてのことでもあつた。

私は巴里では美術學校へ入學した。私の以前に山下君がゐたので、そんな經路からコルモン氏のアトリエに就いた。その他にも繫がに『アトリエの市場』である巴里だけに、研究所も多く、グランド・ショー・ミエール、コロラッシー氏等の研究所へも傍ら通ふことが出來た。學校の夏季休暇は、その期間だけの臨時研究所があつて、同じく美校教授であつたアンベール氏がモンマルトルの方にゐて、直接外光の下で、觸目の自然を描くことをも學んだ。

當時フランス畫壇の形況といへばサロンなどで、專ら全國的な感激をよび起してゐた人々は、アルベール・ベナール、セリーヌ・アマン・ジヤン、シヤルル・コツテ、ルシヤン・シモン、アンリー・マルタン、など畫壇の中心勢力として矚目されてゐた。當時モネーもゐれば、ルノアールも生存し、ドガもゐた。それらはチユイルリー以外で崇敬喝仰の的ともなり、將來を恐れられた新進有爲の人々と目されてゐた。

セザンヌの物故して間もないときで、ドートンヌで遺作展を開いて、その大きな足跡を偲ぶことも出來、ゴオギアンやゴツホの遺作展もたしかあゝだと記憶する。所謂後期印象派に屬する主要な位置をもつた人々の作品に接する期會も多く、巴里畫壇は百花

の一時に咲き誇つた時代であつた。私ども以前に滯歐した人には注意も拂はれなかつた人々が次第に擡頭的勢力の中心となり、それらを見聞した私達には、自ら新興藝術に對する解釋も異なり、接近して吸收する質料も違つてゐた。それが私をして、後に語る二科運動に左袒した一つの動機であつたのも事實であらう。巴里畫壇でもこれらの人は藝術の異端者として嘲笑惡罵をうけ、或人々は非常な同感を得て、新興藝術として主張したり、支持したりされたが、殊に若い新時代の空氣を吸つた人々は無條件の贊意を送り、この新人達に傾倒していつた。そして私達滯歐期が將にその價値と相場を一定して來た時であつて、今日になつて見れば、賞讃こそすれ、何ら怪しむものもなく、百分の一の批難さへ加へるものがなくなつてゐる。新な藝術の勃興には或程度の重壓と迫害は止むを得ないことになつてゐる。これは藝術進歩の一つの道程として定理に近い事實である。印象派の人々、殊にマネーやモネーやルノアールの時代、比較的穩健な主張者にして當時、既に四面楚歌の聲をきいてゐた。

私どもの先輩黑田清輝、岡田三郎助、和田英作君などの恩師で、よき薫育を與へたコラン氏も當時なほ健在であつたが、フランス畫壇の中心圈を離れてゐた形で、餘り昔日のやうな活動はなかつた。出發に際して黑田君から『是非會つて見給へ、いゝ人だから』と紹介の言葉をうけてゐたが、私は氏の畫的傾向を餘り尊ばなかつたので、とうとう最後まで行き會ふこともせず、有島、山下の兩君はたしか教へをうけてゐたやうにも記憶するが、私にはその機會も失はれてゐた。

その後、私は巴里二年の生活を棄てゝ、イタリーの羅馬に畫學修業の旅を重ねた。イタリーへいつて見て、豫ねて聞き知つてはゐたことだが、私の藝術欲求の念は燃え、殊に古い文藝復興期前後の藝術に靈の躍るのを感じた。それは巴里などでは夢にも想像されないすぐれた展望であつた。私の心は跳躍した。が當時のイタリーの現代畫壇は、これに比して對蹠的な慘めさで、過去の夢を無爲に追つてゐるに過ぎない。巴里では、最盛期の絢爛な花と香に醉つてゐた私も、こゝでは、餘りに世紀末的にとり殘された廢墟の頽勢をなげくだけであつた。年々ローマでは展覽會は開かれるには開かれたけれども、觀るべく、聞くべく、教へらるべき何物もなかつた。たゞその中にたつた一つ暗夜の光輝を見出してゐた人はマンチニーだけである。マ氏は精神病的な發作と、歪曲な變態性をもつてゐた。時々頭の病ひを自覺し、身體の異和を失つて來ると、自ら進んで瘋癲病院を訪ねて、靜養してゐるほど——愉快なる變質者であつたが、藝術はこの人が嶄然頭角を現はしてゐ、すぐれた制作を不斷に發表してゐた。

ローマにもフランスのアカデミーがあり、校長にカロリユス・デユラン氏が就いてゐたが、私はパリーの旅を終つてイタリーに立たうとすると、コルモン氏がその人に紹介してくれた。原作が出來ると、一週一回ぐらゐの程度で持つていつて批評を乞ふた。

所定の歸朝期も迫つて來たが、私の畫等はやはり遲い歩みだけしか見せてゐない。朝夕に見る素晴しい雲の殿堂、古代繪畫の精華は、無限の前途を思ひ、涯なき努力を強いて、魂を空にして、苛立を感じないではゐられなかつた。私は其處でとり返しのつか

ない災害に遭つた。フランス以來の自作の目星しいものの數多くを盜まれたのである。金品の盜難は勿論洋の東西を問はないが、畫などを、然かも私どもの制作などを盜まうなどゝは夢寐にも考へなかつた。——

彼方では畫室を貸す時期がきまつてゐた。半期づゝ前家賃で借りるのだが、その時期をとりちがへると二重に拂ふ無駄があつた。私はいゝ畫室を見出した。前住者が旅をしてゐるが、旅が終れば他に移るからといふので豫約の金を與へて、その翌日すぐに引越していつた。いふまでもなく、前住者の荷物や、繪の置き去りにしてゐる處へ、私も私の手廻りと畫を持ちこんでしまつた。恰度その時期を逸することによつて、乏しい旅費の二重負擔を免れやうと考へたのである。そして前住者の歸つて來ぬ中に私は瑞西の旅に登つた。門衛に間違ひを起さないやうにくれ〴〵も言ひ置いて出發した筈である。

オランダ旅行記念　明治40年夏　左より武石弘三郎，湯浅一郎，藤島武二，野口駿尾『東京美術学校校友会月報』第6巻第2号より転載

湖畔の明光は何時までも、その畫の旅から見棄てなかつた。二ケ月ほどして畫室へ歸つて見ると、私の留守中に『彼』が歸つて來て、何處かへ引移つてしまつてゐた。みると、道具は一つ足りないものがないのに、畫——それもキャンヴアスにはつた、未完成のものまでを見失つてゐた。多少自分で自信がもてた畫は全部なくなつてゐた。私は慌てた。門衛を詰問しても一向要領を得ない。『これは畫のわかる奴にやられたな』と直感的に考へて『彼』の引越先を漸くにして探しあてた。彼はそこでも依然旅に出てゐたが、留守居の者に話して、一應彼の畫室を檢べて見た。ある！キャンヴアスにあつた畫は見當つたが、他がない。私の欲する他の制作は視野を遠く離れ去つてゐる。滯歐四年の製作の集積は、見事に拉し去られた儘、一道の光明さへ見出すことが出來ない。私の探偵的行動は見事に失敗に終り、私は絶望の壁に直面した。大使館に交渉しても一向にとり會つてくれず、辯護士をいれたが、遂に小品の一點すら發見できなかつた『キャンヴアスの分は、引越す時に間違つて來たか知れないが、他は知らぬ』と空嘯いてゐた。そして私は不本意にも自作の大部分をイタリーに行方不明の儘、置り去りにして未練と憤懣とを殘して歸朝した。

明治四十三年歐洲から歸つて、殘されだ〔ママ〕一部を私は白馬會で特別出品した。が歸つて見ると、日本の美術界は既にその人員を選んで或る決勝點に向つて、スタートをきつてゐた。走るものは走り、落伍するものは落伍しやうとしてゐた。文展がそれである。出發以前に比して、形勢は頓に一變し、そこには何等の鬪士をいれる餘地がなかつたほど安定してゐた。私の空白（フランク）時代——文展第

五回（明治四十四年）までは勿論自らの修業は別として、何等の對社會的仕事をも見せなかつた。私はその時代を今記憶の底に殘してゐないが、恐らく私の畫が落選したか、妙な權力的安定に不滿をもつたのか、そのいづれかに原因して私は第三回第四回に製作一點發表してゐない。審査員と稱するものゝ顔觸れも固定してゐた。相前後して歸つて來た人には、有島生馬、山下新太郎、齋藤豐作、湯淺一郎、白瀧幾之助、南薫造の諸君があつた。がこの人達が歸つて來ても、日本の美術界はその障壁を撤廢して迎へ、新な戰術を充分發輝させやうとはしない。こはばつた繼子扱ひでなければ、全然除外視して、一向に溫顔を向けやうとはしなかつた。

私はそれでも第五回に『幸ある朝』『チーヴオリ・ヴキラ・デスタの池』の二作を文展に出品してゐる。そして私はこの主題による『私の足跡』の一端にふれていかなければならない使命に到踐した。謂はゞ前書は序文である。がこの序言なしには『私の足跡』の第一歩をも構成することは、恐らく出來ないであらう。

（未完）（文責在太田耕治）

（『美術新論』第五巻第四号。昭和五年四月）

③ 辻村松華の休職、渡仏

辻村松華（本名延太郎。漆工科教授）は仏国ガイヤールの招聘により明治三十八年十一月十八日パリへ向け出発した。辻村の履歴書（本学蔵）には次のように記されている。

明治卅八年十月七日　任東京美術學校教授　内閣
同　　叙高等官八等　同
同　　十二級俸下賜　文部省
同月廿五日　叙正八位　宮内省
同月廿九日　文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ズ　文部省
同月　佛國「ガイヤール」ニ聘セラレ同工場ニ於テ髹漆蒔繪ヲ傳授シ旁ラ蒔繪ノ應用範圍ニ就キ調査研究ス
同卅九年九月　佛國巴里「フヂナワー」工場ニ於テ「ドリユール、ベヤルニー、マタン」「ヴァニス」類塗料ノ製作ヲ實地練習ス
十二月　瑞西國ジュネーブ市女子工藝學校ノ聘ニ應ジ一箇月間交換教授ヲ爲シ錫板彫鏤ノ技術ヲ練習ス
同四十年一月　獨逸、ベルジック、英國ヲ歴視シテ歸朝ス
十一月廿八日　休職滿期〔退官〕

辻村は藤島武二と反対に大変筆まめで、横浜出港後パリ到着までの見聞を校友会に書き送り、それが「渡仏記行」として『東京美術学校校友会月報』第四巻第六、七、九号に連載されており、また、パリやジュネーブ滞在中の書簡も同誌に掲載されているが、一緒に出発した藤島の消息をそれらから得ることはできない。ただ、パリに着き、先ずスフロー・ホテルに入り、そこで偶然白浜徵と桜岡三四郎に出合い、「五六日滞在して、都合上菅原氏と外一名とは、他